様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ５ 月　 ７ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０４０４９

研究課題名（和文）森崎和江の越境する連帯の思想

研究課題名（英文）Kazue Morisaki's ideas of solidarity crossing border

研究代表者
玄　武岩（HYUN, MOOAM）

北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・准教授

研究者番号：８０３７６６０７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,100,000円

研究成果の概要（和文）：植民地朝鮮に生まれた詩人・作家の森崎和江（1927－）は、植民者二世としての原罪意識を、徹底した自己の否定によるアイデンティティの再生を目指して反芻しつつ、自らの原点に位置づけた。自身の朝鮮体験を追想する『慶州は母の呼び声－わが原郷』を著すのは1984年のことであるが、『からゆきさん』（1976）など一連の著作を森崎和江の「境界論」の生成過程のなかに位置づけ、その思想的軌跡を連続したものとしてとらえることで、「越境する連帯の思想」という、森崎研究における新たな視点を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
朝鮮半島の大邱に生まれた植民者二世の森崎和江は、戦後、植民地で感性を養ったことを「原罪」と受け止めて苦悩する。筑豊でのサークル運動で知られる森崎和江の思想への射程は、これまで労働および性、からゆきさんをテーマにした日本社会の「断層」に向けられてきた。しかし、森崎和江の一連のテクストを「境界」を中心に読み直すと、その連続した思想的軌跡には、東アジアに向けた越境する連帯へと収斂する思索と実践の数々が込められていることが見えてくる。こうした境界破りの越境する思想的課題を日本と韓国で共有できれば、歴史問題で混迷をきわめる両国において加害と被害を越えた連帯のあり方を模索するきっかけにもなりうる。

研究成果の概要（英文）： The poet and writer Kazue Morisaki (1927-) considered herself as suffering from the "original sin" of being born in Colonial Korea. Conscious of the "border" between Japan and Korea, she devoted her insights to the question, "What is the Korean problem for the Japanese people?"
Morisaki has positioned the "original sin" as a second-generation colonialist as her own starting point. It was in 1984 that she compiled Keishu Is My Mother's Voice Calling: My Hometown to remember her own Korean experience. However, when reviewing a series of Morisaki's texts, as "a journey to bury original sin" from a transborder perspective, a long road towards East Asian solidarity emerges. By clarifying how Morisaki's Korean experience and her unique memory as a colonist reverberated in her works, it is possible to uncover the significance of border crossing in Morisaki's ideas of solidarity, which were guided by a history of interaction interwoven by Asian women.

研究分野：社会学

キーワード：森崎和江　植民者二世　越境　連帯の思想　在韓日本人女性

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

これまで森崎和江の思想への射程は、労働やからゆきさん、女として「産む」ことの性をテーマにした日本社会の「断層」に向けられてきた。結局、日本社会の「断層」に立ち向かう森崎和江の思想考察において、植民地主義の問題意識は後景に追いやられた。近年、その思想から「境界」を越える「越境」の視点を捉えようとする動きがみられるが、この「境界」の意味はまだ十分に捉えきれていない。それは森崎の多彩な思想的軌跡にもよるが、サークル村の運動にかかわる思想研究および女性史研究と、植民者二世としての引揚げ文学の領域とで森崎和江を別の存在として断絶していることが原因と思われる。しかし、これらの交差する地点に立つと、朝鮮半島や沖縄（与論島を含む）に向けられた森崎和江の視線からは、アジアに広がる一貫した思考と場所の空間性がみえてくる。

２．研究の目的

（1）民族・階級・ジェンダーを遮る「断層」をどのように取り払い民衆の連帯を築くことができるのか。詩人・作家の森崎和江はこうした思想的課題を抱えながら、日本と韓国における「境界」を意識し、そこに潜むポストコロニアルの領域を切り開きつつ「日本民衆にとって、朝鮮問題とは何なのか」を先鋭に問い続けた。本研究は、森崎和江の朝鮮体験および植民者としての記憶の特有性が作品世界とどのように響き合っているのかを明らかにし、アジアの女性たちが織りなす交流の歴史を追い求めた森崎和江の連帯の思想を貫く「越境」の意味をあぶり出すことを目的とした。

（2）『からゆきさん』（1976）は、こうした「国境の民」が「血縁の原理」からなる共同体の「境界」にとらわれることなく、「共同の原理」にもとづいて生活圏を自由に拡大していった「国境に近い女の歴史」であることを物語る森崎和江の代表作である。森崎は在韓日本人女性について多くのことを語ってはいないが、日韓の「境界」の解体を試みたこれら在韓日本人女性の歴史的実体を「国境に近い女の歴史」のなかには位置づけることで、日韓関係における「境界」にとらわれないもうひとつ歴史的空間を浮かび上がらせることができる。

３．研究の方法

森崎和江の越境する思想の軌跡には、アジアに向けた連帯へと収斂する思索と実践の数々が込められている。だからこそ、森崎の植民者二世としての原罪意識が、ポストコロニアルの問題領域へと内発する境界破り＝連帯する思想の基盤として連続していることを示すことが求められる。それは、これまで個別に論じられてきた森崎和江のテクストを、「越境」を中心に据えて読み直すことで可能になる。したがって本研究では、森崎和江の朝鮮－引揚げ－筑豊－訪韓－『からゆきさん』－『慶州は母の呼び声』（1984）－『こだまひびく山河の中へ』（1986 年）へと連なる歴程を〈原罪を葬る旅〉として位置づけた。こうした方法的視座に立ち、朝鮮体験から漂白する自己の回復への過程を連続するものとして捉えることで見えてくる森崎和江の作品世界を、同世代の植民者二世の文学者と比較しながら、主要なテクストの言説をとおして、その共通性および特有性を考察した。

４．研究成果

（1）本研究は、森崎和江の思想の歩みを、植民者二世としての体験に根ざす原罪意識を出発点として、東アジアにおける越境する連帯の思想に至るプロセスとして捉えた。森崎和江の作品世界を、日本社会の「断層」分析と、朝鮮半島・沖縄に向けられた「境界」（＝「越境」）分析に区別しながら、『慶州は母の呼び声』をベースに森崎の軌跡を再構成し、「徹底した自己の否定によるアイデンティティの再生」という場所に、森崎の「原点」（原罪意識）を見出した。こうした分析をとおして、森崎和江の「接触の思想」がポストコロニアルの「越境性」へ転化する「独自の格闘」のプロセスとしてその思想的軌跡を再評価したことは、既存の森崎研究にはない新たな視点といえる。さらに、森崎和江の「境界論」（＝「越境」論）の生成過程のなかに「からゆきさん」を位置づけ直した点や、竹内好の「アジア主義」を媒介に論じた点、小林勝、五木寛之、西川長夫ら他の植民者二世と比較して論じた点は、本研究のユニークな成果といえる。

（2）朝鮮戦争による多くの孤児たちを育てた尹鶴子（田内千鶴子）や「在韓日本人妻の母」と親しまれた西山梅子の経験は、森崎和江のいう「国境に近い女の歴史」といえる。これら女性の生き様に触れれば、「両民族の限界破り的機能を果たすところの媒介者の思想」（森崎和江）をすくいあげることができる。こうした国家権力を媒体にすることなく直接的に「互いの本質をコミュニケートする」契機を突きつめる森崎和江の境界破りの越境する思想的課題を日本と韓国で共有できれば、歴史問題で混迷をきわめる両国において加害と被害を越えた連帯のあり方を模索するきっかけにもなりうる。

＜引用文献＞
①森崎和江『異族の原基』大和書房、1970 年、p.12

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 1 件）
①玄武岩「森崎和江の〈原罪を葬る旅〉―植民者二世がたどるアジア・女性・交流 の歴史」『同時代史研究』査読有、11 号、2018 年、pp.3-21.

〔学会発表〕（計 3 件）
①玄武岩「森崎和江の越境する連帯の思想－植民者二世の〈原罪を葬る旅〉」日本移民学会、2018 年 6 月 26 日、南山大学
②Svetlana Paichadze and Mooam Hyun, ‘ Between “Repatriation” and “Returning Home”: Experience of Japanese Women Left Behind in South Korea and in Sakhalin in 1960s’, International Conference on New Frontiers in Japanese Studies, 18 September 2018, University of Melbourne
③玄武岩・松井理恵・宋恵敬「森崎和江の越境する連帯の思想」（パネルセッション）東アジアと同時代日本語文学フォーラム、2018 年 10 月 20 日、復旦大学

〔図書〕（計 1 件）
①玄武岩「在韓日本人の戦後－引き揚げと帰国のはざま」今西一・飯塚一幸編『帝国日本の移動と動員』大阪大学出版会、2018 年、pp.307-341.

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。